ふるさとの誇り 121

江戸時代の特産品「西郡（にしごおり）の木綿」

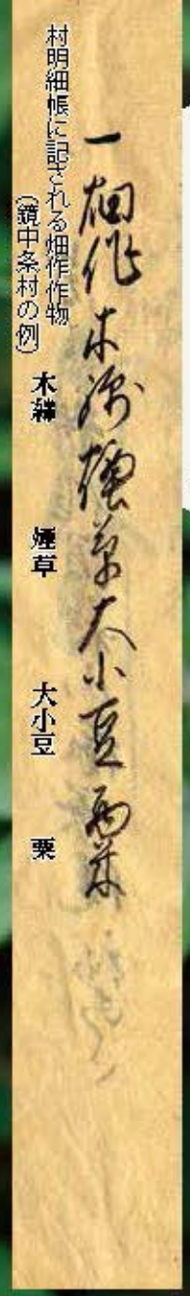
現在の南アルプス市といえば、言わずと知れた果樹王国。春先のサクランボからスモモ、モモ、ブドウと果樹栽培が盛んに行なわれています。しかし、江戸時代、かつてそこは綿花の一大生産地でもあったのです。

村明細帳に記される農閑期の生業（鏡中条村の例）

男は耕作の間、秣山稼並びに縄、ねこた（※）

女は木綿糸取り、同布少々うつ織出し

村明細帳の例
「諸事明細書上帳」
天保9年（1838）鏡中条村
南アルプス市蔵



村明細帳に記される畑作作物（鏡中条村の例）

木綿　煙草　大小豆　粟

東郡の養蚕・生糸、郡内の絹織物、西郡の木綿、河内の紙漉き

県内には、このような言葉も残り、現在の南アルプス市域を中心とする、かつての西郡地域では、木綿が特産品であったことが分ります。

甲斐国に木綿づくりが伝播したのは、戦国時代になってからといわれていますが、市域では、御勅使川扇状地上の原方（はらがた）と呼ばれる乾燥地帯や、市域南部の南湖地区などを中心に、江戸時代には盛んに綿花の栽培が行なわれるようになりました。それはこの辺りの夏季の高温・少雨な気候と砂礫質の土壌が綿花の栽培に適していたためで、特に釜無川の洪水流が運んだ砂質の土壌からなる市域南部、現在の南湖地区周辺で作られる布は「奈胡白布（なごのはくふ）」といわれ、特に品質の良い、いわばブランド品として有名でした。

江戸時代に編さんされた地誌である『甲斐国志』にも、

奈胡白布ト云ハ木棉ノ好キ処ナリ

本州（甲斐国）ノ産ハ其色絞白ニシテ綿強シ、巨摩、山梨、中郡多且ツ美ナリ、奈胡ノ庄最モ多産トス

と記されています。江戸時代にこの地域で綿花の栽培が盛んだったことは、地域に残されている古文書などからも明らかになります。各村ごとの人口や生業などを幕府に報告した「村明細帳（むらみょうさいちょう）」を見れば、現在の南アルプス市域にあった村々のうち、中山間地を除くほぼ全ての村で綿を栽培していたと記されています。

またそこには、やはりほとんどの村で「耕作のほか、女は木綿布かせぎ仕り候」とか「作間、女は木綿布織り渡世（とせい）仕り候」などと記され、農閑期には収穫した綿花を原料に各家庭で糸を紡ぎ、布を織っていたことが分ります。糸車をまわす風景や機織は、かつてはどこにでもあった南アルプス市域の原風景だったのです。

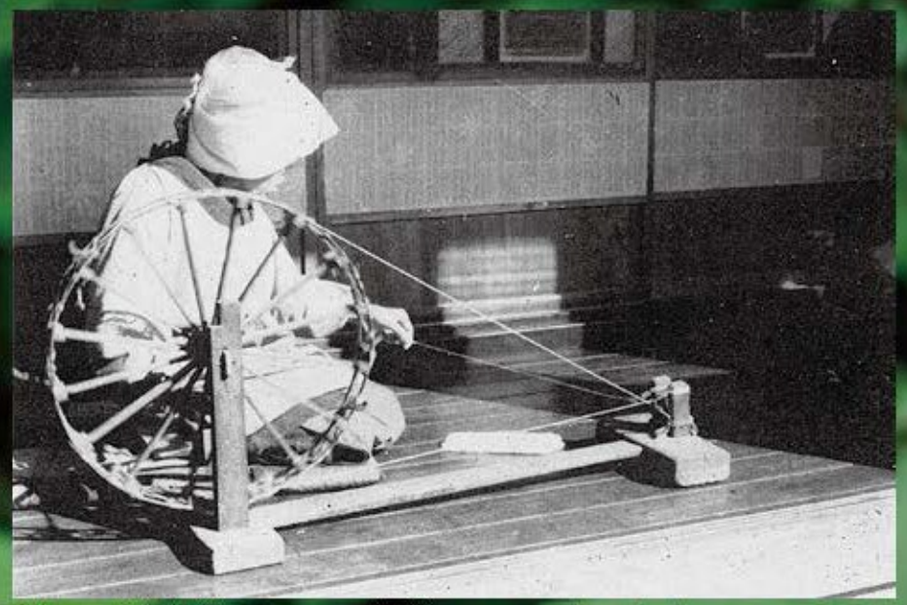
そして各家庭で紡がれた糸や、織られた布の一部は、先月ご紹介したような紺屋に持ちこまれ、藍によって染色されました。しかし、多くの糸や布が持ち込まれる割に紺屋の数は多くはなかったらしく、地域には、こんな言葉も残っています。

紺屋のあさって（※※）

最盛期だった江戸後期から明治時代には、市域の畑作地の半分以上が綿花の栽培に用いられたともいわれていますが、先月紹介した藍染が、その後化学染料に押され衰退したように、綿花栽培もまた、安価で品質のよいインド綿やアメリカ産の綿などに押されて明治二十年（一八八七）頃をピークに次第に衰退し、煙草や特に粟の栽培に取って代わられました。

西郡の木綿づくりは、水稲耕作には必ずしも適さない地質を逆手にとったアイディアでもありました。その歴史から私たちは、氾濫や土石流といった河川災害によって造られた西郡の大地で、人々が災害に苦しみながらも、その時々に最適の作物を選択し、粘り強く生きて来たことを知ることができるのです。

文／写真　文化財課



糸車による糸紡ぎの様子。かつては、どの家庭でも見られた南アルプス市の原風景（昭和 40 年頃か）。中込松弥著『西郡史話』より

市内には、糸車や綿繰機（わたくりき）など、綿織物に関する古民具（民俗資料）が数多く残されています。これら民俗資料の存在は、かつて南アルプス市域で綿花栽培が非常に盛んだった歴史と、それを育んだ地域（西郡：にしごおり）特有の風土を我々に教えてくれます。近年は、少しづつですが、市内の小学校などで、このような古民具を実際に活用して、地域の伝統や風土を伝える試みも始まっています。写真は授業で栽培した綿花を紡ぐ落合小での授業風景。紡いだ糸は、同じく栽培した藍で染められました（広報先月号を参照）。

※　根子太。菊蓆を編んで造った大型で厚手のムシロ。

※※　紺屋に糸や布を持ち込んでもすぐに染めてもらえなかったことから生まれたことわざ。